ナラノヤエザクラについて

川端一弘

ナラノヤエザクラは『詞花集』の

「一条院御時、奈良の八重桜を人のたてまつりて侍けるを、そのおり御前に侍ければ、その花をたまひて、歌よめとおほせられければよめる

いにしへの奈良のみやこの八重ざくらけふ九重ににほひぬるかな

伊勢大輔」（岩波書店、新日本古典文学大系による）。

と短歌の詞書にあることから付けられた和名であるあることは意外に知られていない。その後の文献には平安時代末の『袋草紙』、『枕草子』などに見られます。流布本により取り上げられないこともありますが『沙石集』にも東円堂前にあることが記録されています。直接ナラノヤエザクラの名はありませんが私は平安時代の『金葉和歌集』巻五、賀歌にある八重桜という桜はナラノヤエザクラではないかと思っています。ナラノヤエザクラはカスミザクラが突然変異して生まれたサクラです。

禁中翫花と言へる心を詠める

九重に久しくにほへ八重桜　のどけきはるのかぜと志らずや

中納言実行

ナラノヤエザクラはカスミザクラが突然変異して生まれたサクラです。ですから私は伊賀上野の花垣の庄のものは奈良から移植したものでなく現地で誕生したものではと考えています。このサクラについて行動録では牧野富太郎は「ナラヤエザクラと云ふサクラは東京にも一本あります。又これと同種でただ子房一本ある点が違ふのみにて他は其形態の同じき品が下野那須あります。又那須と同じ品のものが秋田県にあります。ナラヤエザクラは奈良と京都のみの桜ではないやうです。存外広い分布を有っています。」と「牧野富太郎植物採集行動録昭和篇」昭和11年７月20日の記事にあります。牧野は三好学との軋轢対抗上ナラヤエザクラとしています。

残っている全部の『沙石集』の翻刻ではないですが『沙石集』にもナラノヤエザクラの記事があります。東円堂という名前があるため引用しておきます。

奈良の都に八重桜と聞こゆるは、当時も東円堂の前に有り。そのかみ、時の后上東門院、興福寺の別当に仰せて、かの桜を召されければ、掘りて車に載せて参らせける。ある大衆の中に見合ひて、事の子細を問へば「しかじか」と答へけるを、「名を得たる桜を、左右なく参らせらるる別当、返す返す不当なり。僻事なり。且つは色もなし。后の仰せなればとて、是程の名木を争（いかで）か進（まいら）すべし。とどめよ」とて、やがて貝を吹き、大衆を催して打ち留め、「別当をも払ふべし」などまでののしりて、「この事によりて、いかなる重科にも行はるれば、我が身張本に出づべし」とぞ云ひける。

この事、女院聞食し給ひて「奈良法師は心なき者と思ひたれば、わりなき大衆の

心かな、実に色深し」とて、「さらば我が桜と名付けん」とて、伊賀国与野と云ふ庄を寄せて、花の盛り七日、宿直を置きてこれを守らせる、今にかの庄、寺領たり。昔もかかるやさしき事ありけるにこそ。

つぎに重要な文献は『七大寺巡礼私記』大江親通（？～1150）です。大江が保延６年（1140）に再び南都古寺を歴訪してできたのが『七大寺巡礼私記』である。

東円堂

在於興福寺東門之北脇、其堂南門之西脇有桜樹、所謂奈良都之八重桜是也、古伝云、此桜一切桜花散之後、始以開敷、是為奇特云丶、

アハレテフ　コトヲアマタニ　ヤラシトヤ　ハルニヲクレテ　ヒトリサクラム

成人云、此歌者在古今和歌集、故人見卯月桜花詠也、即此桜云丶、予三月十五日見件木未咲、誠遅桜也、甚叶故人詠者也、延喜御宇之時、従南都折八重桜備叡覧、干時天皇召蔵人為勅使、令献於伊勢御安所給、勅使申云、可令進和歌之由、□云丶、以紅□一重賜御使、令献此歌給云丶

イニシヘノ　ナラノミヤコノ　ヤヘサクラ　ケフココノヘニ　ニホヒヌルカナ

『奈良文化財研究所史料22』より引用しました。ナラノヤエザクラは遅咲きの八重桜であることを語っています。

近年現在文に翻刻された江戸時代の『庁中漫録』にもナラノヤエザクラについて記載されています。（『庁中漫録』１翻刻版2016. 奈良県地域振興部文化資源活用課）東円堂前のものは一時枯れ、明王院にあったことが記載され、ナラノヤエザクラは蘗により増殖されていたことが記載されています。その他名所案内記や旅行記、図譜などに記載されたものは多いですが紙面の都合上略します。

明治になると名所案内記、紀行文に東円堂址のナラノヤエザクラが多く案内されています。特に注目したいのは・明治25年（1892）の鳥居武平著『奈良名所案内詞』購文堂８月初版本です。ナラノヤエザクラは

（六六）八重桜　今は師範学校の門内にあります。此所はもと東円堂の旧地でござる、此桜御一新後すたってござりましたが、博覧会社が碑を建て石柵を設け八重桜の新樹を植へました事でござる

昔一條帝の御時八重桜を奉りたるに歌よめと仰せられしに伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな

とよまれました、此花は殊に名花でござります」

とあります。博覧会社とは明治七（一八七四）年八月、時の奈良県権令藤井千尋のすすめで、植村久道・鳥居武平・橋井善二郎ら奈良の有力町民が奈良博覧会社（資本金三五〇〇円）を設立し、東大寺の龍松院に本社をおいた。そして翌八（一八七五）年四月一日から六月十九日までの八〇日間、東大寺大仏殿と回廊を会場に第一次奈良博覧会が開かれた。『奈良県の歴史』（2003）山川出版社より。

この碑や石柵は現在も残っています。（残念ですが奈良県の無理解の為工事で石柵が取り払われました）

この八重桜を天然記念物に相応しいと申請したのは岡本勇治です。自身の著書註1で語っています。大正８年に制度として施行された天然記念物は日本の多くの名桜が各地から申請され指定を受けています。残念ながら岡本等の申請書類などは内務省が関東大震災のために全焼して残っておりません。岡本からの申請をうけて三好学が天然記念物としての調査に来県しております。大正12年５月６日の大阪朝日新聞には

人

○三好理学博士　五日午前九時三十七分来市、奈良知足院境内の八重桜を視察の上、磯城郡初瀬寺の牡丹を観賞、午後六時二十分奈良経由で帰京

とあり岡本の申請により天然紀念物の調査のため三好が来県しております。「天然紀念物調査報告35」1924で三好は「（前略）知足院ノ奈良八重桜ハ何レノ頃ヨリ伝ハレルカ詳ナラズ、同院ノ外奈良県師範学校ノ門内（興福寺勧善院東円堂のこと）及官幣大社春日神社ノ境内ニモ同様ノ桜アレドモ何レモ小樹ナリ（三好の誤解で春日神社のものは老樹）（後略）」と記しています。また三好は自身の『桜』の原本に全国からサクラの申請があったのでおおいにサクラの研究が進展したことを記しています。（覆刻版では省略されている）

結局知足院のナラノヤエザクラのみが天然記念物の指定1923を受けました。三好は「日本の桜の研究」1922でPurunus antiquaを発表している。

大正12年には小泉源一が「東亜植物考察」『植物学雑誌』37としてナラノヤエザクラをケヤマザクラ（カスミザクラ）の品種として記載しました。小泉はHab. Japan: Nara,Chion-inn Templa Buddhisticaとしていることである。三好が京都とし特定の場所をささず広範囲を示しますが、具体的に知恩院としていることである。

このようにナラノヤエザクラは植物学者により記載されたが、新聞記事にもその消長が記事となっている。大正14年４月24日大阪朝日新聞、昭和４年３月20日大阪毎日新聞、昭和５年４月16日大阪朝日新聞、昭和５年７月１日大阪朝日新聞などの奈良版です。特に昭和10年５月１日の大阪朝日新聞奈良版には「小清水女高師教授が附属高女中庭で」と発見記事があり、昭和10年５月５日の大阪朝日新聞には県公園課の調査により奈良公園にはたくさんのナラノヤエザクラが成育していたことが記事になっています。

その後も久内清孝（1929）、牧野富太郎「Prunus serrulata L. var. antiqua（Miyoshi）Makino」5(3):13、（1928）香山益彦・香山時彦『櫻』1943晃文舎などナラノヤエザクラについて多くの学者により記載されています。『牧野富太郎植物採集行動録』2005には昭和11年７月20日郵着の封書のなかに「ナラノヤエザクラと云ふサクラは東京にも一本あります。又これと同種でただ子房一本ある点が違ふのみにて他は其形態の同じき品が下野那須にあります。又那須と同じ品のものが秋田県にあります。ナラノヤエザクラは奈良と京都のみの桜ではないやうです。存外広い分布を有っています。」と記しています。現在では遺伝子による解析でナラノヤエザクラはカスミザクラが突然変異したものであることが分かり、平野弘二氏からの私信では高槻にも突然変異したものがあるそうである。ナラノヤエザクラは一本ではなかったのです。

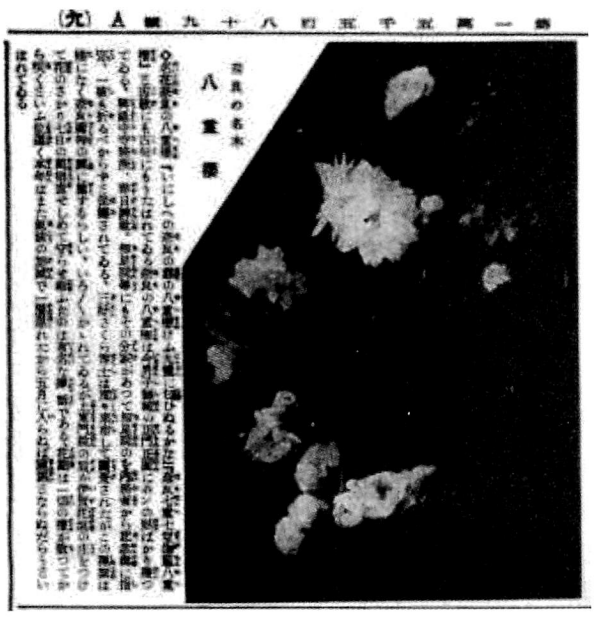
三好学は天然記念物の調査報告書で知足院のナラノヤエザクラの由縁を記載し、写真の撮影者岡本勇治を記しています。三好は岡本勇治を信頼していた様子で38才という若さで亡くなった岡本の追悼文を記載しています。学会の重鎮であった三好が一市井の研究者のために追悼文を書くなどということは皆無であり異例のことです。また岡本勇治もこの桜に思い入れがあったようで息子さんの言によると家にアルコール付けの標本があったそうです。

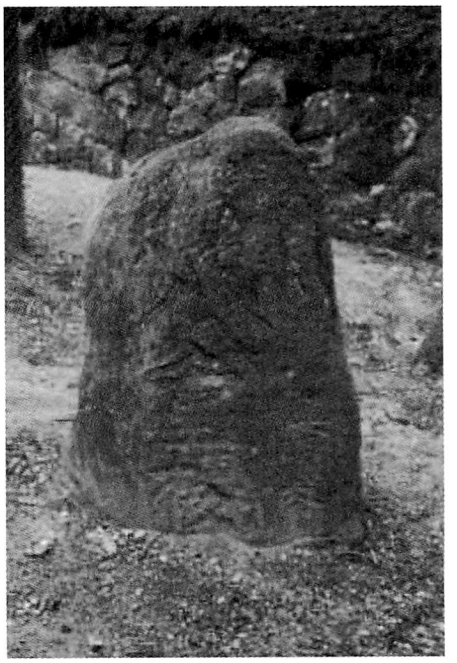
新聞記事の大正14年４月24日、大阪朝日新聞より以下に引用してみます。

奈良の名木　八重桜

◇名花奈良の八重桜『いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな』

『奈良七重七堂伽藍八重桜』と古歌にも古句にもうたはれている奈良の八重桜は今男子師範の正門正面にホンの形ばかり残っている、興福寺寺務所、春日神社、知足院等にも


奈良の名木
八重櫻



その分家があって知足院のを内務省から記念樹に指定、一枝も折るべからずと保護されている、三好さくら博士は度々来市して調査されたがこの種類は他になく奈良独特の種に属するらしい、いろいろかゝれているが上東門院の后が伊賀花垣の庄をつけて花のさかり七日の間宿直せしめて守らせ給ふたのは有名な挿話である、花期は一切の桜が散ってから咲くといふ位遅く、本年はまた気候の加減で一層遅れたから五月に入らねば満開とならぬだらうといはれている

昭和10年５月５日　大阪朝日新聞には

名勝に新点景　甦る古都の名木

公園隈なく八重桜実情調査

県公園課の手で

衰滅に瀕する古都奈良の名木八重桜については奈良女高師植物学教室小清水教授が研究的に隠れた残木の探査を進めているが、一方名勝奈良公園を預かる県公園課では古都観光地の一景物として保存上の立場から、こんど同教室の応援を乞ひまず公園一帯にわたる八重桜の現状調査を行ふに決定、三日同課川島技手は同校久米助教授と共に杜深く匂ひを探ねつゝ実地踏査を行った、この結果現存する八重桜は例の天然記念物指定東大寺知足院の古木をはじめ男子師範学校玄関口および既報小清水教授発見の同校附属女学校庭、高畑町生川清満氏宅などにある八本ほか東大寺、興福寺、春日神社境内あるひは県公会堂にも幾分残ってをり、全部で四十八、九本あることが明らかになった、これらのうち県公会堂のは根廻り五尺余といふ老大木、二号館前に二本もあって目と鼻の間にありながらけふまで気付かずにいたものだが、公園課ではその標本とともにこれを文部省嘱託三好博士に報告、とくに公会堂の分は天然記念物の指定方を申請することになった、同課ではかうして相当残木のあるうへはこれらを元木として今後ウント繁植し公園内各所に接木増殖を行って亡びゆく名木を大々的に復活、開花期も幸ひ四月下旬から五月上旬にかけての遅咲きで、奈良公園としては藤の見頃までをつなぐもっけの点景ともなるので風致上からも積極的にこの計画を進める意向である

発見を記念して碑が建立されたようで今も公会堂の入り口附近には碑が残っている。「此門内八重桜」と刻まれナラノヤエザクラを案内するものであった。

若草山山麓の「奈良七重七堂伽藍八重桜」の句碑について

句碑は、若草山の山麓北端、手向山八幡宮近くに建てられている。碑文には「奈良七重七堂伽藍八重桜　応需抱一書」とのみあり、ほかには文字は刻印されていない。裏面にも文字はなく、この句碑の建立由来を示すものはない。ためにこの句碑についてはいろいろな由来説が句碑愛好家によりなされていた。

句碑から手がかりとなるものは「応需抱一書」のみである。抱一とは江戸時代の画家である酒井抱一である。句は「応需」とあるように抱一の求めに応じて讃を行ったと理解される。そうであれば讃をおこなったのは誰か。それには抱一の桜の絵を探索しなければならない。刻印された文字からはこのように理解できるであろう。建立については三好学が「桜に関する図書解題略」三八九において

碑は奈良嫩草山の麓に立ち、芭蕉の「奈良七重七堂伽藍八重桜」の句を刻す。「応需抱一書」とあり、岡本勇治氏の寄贈にかゝる。

としている。

碑は岡本勇治氏の寄贈のようであるが、それでは岡本が建立したのはいつの時であろうか。大正６年２月９日の大阪毎日新聞（紀和版）には「古歌と奈良公園」という記事が掲載されている。

（前略）彼の二月堂の「水取や籠りの僧の沓の音」と云ふ

▽芭蕉の名句　も同堂の稲岡君が信者間を説いて苦心の結果去る大正二年に現在の句碑が建設されたので、斯う云ふ風に猿澤池にも浅茅ヶ原にも建てゝ行かれたら句碑廻りと云ふ趣味のある遊覧も能（で）きるのである、現在公園にある句碑は二月堂のものと三笠山麓にある同じく芭蕉の「七重八重七堂伽藍八重桜」（原文のまま）と云ふ碑があるのみで、木辻町称念寺の境内に在る芭蕉の「菊の香や奈良にはふるき仏達」と云ふ碑を加へても▽僅に三碑　より無いのである、（後略）

とあり、大正６年には二月堂の句碑とともにすでに建立されていることが分かる。岡本の生年が明治28年（1895）であるから記事に掲載された大正２年（1913）には18歳ということになる。岡本は大正４年11月２日に奈良女子高等師範学校の助手補となっており植物研究の歩を踏み出しつつあった。岡本の生涯については北川尚史「岡本勇治―奈良県植物研究の先駆者―」復刻版『大和植物志』1997に詳しい。岡本（岡本家へ婿養子となる）の生家植田家は50町歩の水田を保有する豪農であった。五男であった岡本は母に寵愛され金銭的に自由であった。句碑の建立がこの間であれば岡本による建立と云うことは十分にいえる。

『植物研究雑誌』にみるナラノヤエザクラ

○牧野富太郎1926植物研究雑誌4「Prunus serrulata L. subsp. pubescens Makino var. antiqua（Miyoshi）Makino」3(4):1、(1926)

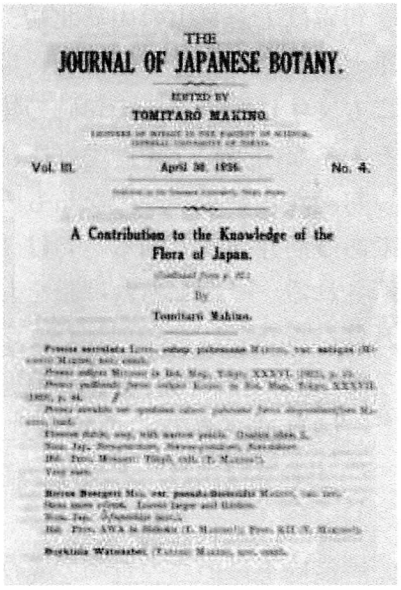
「Flowers duble, rosy, with narrow petals. Ovaries often 2.

Nom. Jap. Nara-yaezakura, Nara-no-yaezakura, Nara-zakura

Hab. Prov. Musashi：Tokyo,cult.（T.Makino!）. Very rare.」

牧野富太郎「Prunus serrulata L. var. antiqua（Miyoshi）Makino」5(3):13、(1928)

「Nom. Jap. Nara-yaezakura」


THE
JOURNAL OF JAPANESE BOTANY.
EDITED BY
TOMITARO MAKINO
Vol. III. April 20, 1926. No. 4.
A Contribution to the Knowledge of the Flora of Japan.
By
Tomitaro Makino.

ナラノヤエザクラは大阪の高槻にも成育すると平野氏より連絡いただいた。ナラノヤエザクラはカスミザクラが突然変異したものであり牧野富太郎が「牧野富太郎植物採集行動録昭和篇」にあるように（昭和11年7月20日の郵便）奈良だけのものでないようです。多摩森林科学園の遺伝子調査では奈良のものと関東のナラノヤエザクラとは遺伝子的には違うものだそうです。このことは突然変異を証明するものでありときたまカスミザクラが重弁化したものが見つかるようです。ナラノヤエザクラは決して奈良のものだけに限らないようです。

最後にナラノヤエザクラについて分布情報をいただいた平野弘二氏には深くお礼を申し上げます。

註１　岡本勇治の著書「春日山原始林植物調査報告」1926この著作は奥付部分が欠落しているが調査会報告に新たに謄写印刷された年代を著昨年とした。川端一弘「岡本勇治の著作「春日山原始林の植物調査報告」の著作年について」2003奈良植物研究25などを参照とした。

参照文献は文中に記載したが以下のものも参照した
三好学. 1924. 天然紀念物調査報告35「知足院ノ奈良八重桜」
平野弘二. 1993. ナラヤエザクラの母種と分布. 奈良植物研究16：25－28
久内清孝「さくらニ現ハル、双生ノ雌蘂」6(6):186-187（1929）
堀井甚一郎『稽古照今』1943奈良県師範学校「奈良八重桜について」295-296
香山益彦・香山時彦『櫻』「奈良の八重桜」1943晃文舎
『日本の桜』山と渓谷社、ナラノヤエザクラ（カスミザクラの重弁化したもの）
山本正江・田中伸幸『牧野富太郎植物採集行動録』2005